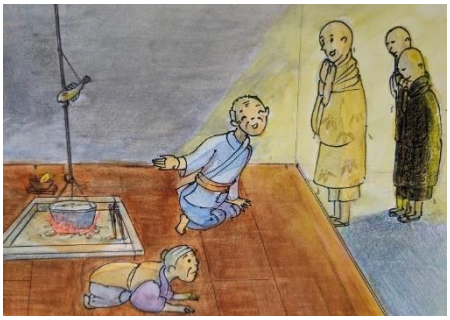
12．行脚の弥陀

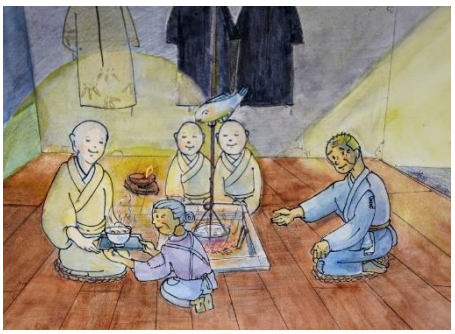
1．ある年のことじゃったが 、所沢一帯では日照りが長く続き水不足で作物の育ちがめっぽう悪かったんだ。
特に、山口堀之内村一帯では、いつも水に苦労してきた土地柄でな、この年は陸稲も麦も思ったようには穫れねえで、貧しい生活を送っていたんだ。
それでもな、村人は我慢強く毎日暗くなるまで野良仕事に出て働き、何度も遠くの柳瀬川から水を運び作物を大事に育てながら暮らしを立てていたんだな。
そうして、暑い夏が過ぎて涼しい秋風が吹くころになって木々や庭の柿も彩づき、山のイガ栗も開いてきて少しだけんど実が穫れるようになってきた。
村人たちにも、すこし笑顔がもどってきたんだな…。
さ～て、この話だがな、秋も深まったころの村でのことで、なんとも不思議なことがあったんじゃよ・・・。

2．秋も深まった村に、立派な身なりのお坊さまが二人の僧を伴って行脚をされているというう わさが立っていたんじゃ。
男衆も女衆も若い衆も、村人どうしが出会うとあいさつもそこそこに、その話でなぁ、
「あの有難いお経をあげてくれるお坊様はいったい誰だんべ？」
「お顔だちも身なりも立派だけんど、どこのお坊さまだんべな？」
「貧しいわしらのために、一軒一軒お経をあげてまわり功徳を施してくれているようだのう…」
「わたしらのためになぁ～、何とも有難いことじゃ！」
「な～んにも、さしあげるものはねえけどなぁ…」
「ほんとにそうじゃ」
「そうじゃなあ～」
と、そのお坊様たちのありがたいお姿を思い浮かべて、頭を下げて手を合わせたんじゃ。

3．ある日のことじゃ、
お日様が、山の向こうに沈もうとするころ、いつものように堀之内村の老夫婦は一日精一杯に働いて、額の汗を拭きながら、
「間もなく日が暮れる、今日も一日よう働いた。阿弥陀様に手を合わせて帰るとしようや、ばあさん」
「そうじゃね～。お参りして帰るとしようかねぇ～」
と、野良着の泥を払いながら、腰に手をあてて立ち上がり夕焼けを背に受けながら二人揃って来迎寺まで行きお参りしたんじゃ。



4．その日の晩のことじゃがの、おじいさんとおばあさんは夕餉に、囲炉裏の鍋からあったかいだんご汁をすすり、腹を満たしたところで、そろそろ寝ようかのうと腰を上げたところ、「トントン」と戸を叩く音がしてな。
「はて？ ばあさんや、こんな夜ふけに戸を叩くのは誰じゃろか？」と、言いながら開けてみると、トバックチにお坊さまがお供を連れて立っているではないか？。
お坊さまは「すっかり日が暮れてしもうた。すまないが、わしらを今晩泊めてくださらんかな」と、頭を下げて言うのじゃよ。
おじいさんはおばあさんと顔を見合わせて、うなずくと
「それはそれはたいへんでしたのう、どうぞどうぞこんな粗末なとこですが、あがってくんしぇー」と、優しい言葉で招き入れたんだ。



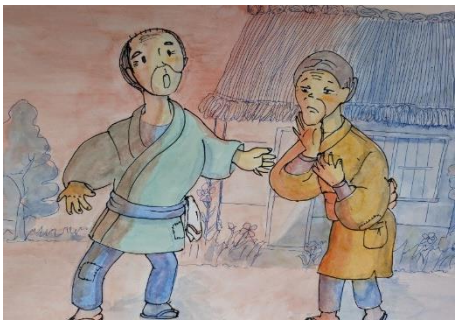
5．おばあさんは、お坊様から夜露に濡れた衣を預かり、囲炉裏の近くに干しておいた。そうして囲炉裏の前に座ってもらってな、鍋からあっためた汁をよそって、「なんにもねえですが、だんご汁をひと椀、おあがんなさいまし」と、三人に差し出したんだ。
「これはこれは、身体が温ったまる、なんとも有難いことじゃ」と、とてもうまそうに汁を飲み干し、
「ごっつおさんでした」と、頭を下げて、丁寧にお礼を言ったんじゃ。
おばあさんは、お椀を受け取りながら、そっと、お坊さまたちの顔を覗いて見たんだよ…。
「は～て？　来迎寺の阿弥陀様にそっくりじゃが～…　お供の僧までも両側に立つ菩薩様によ～く似ているがな～…？」
と、心の中でつぶやいたんだ。

6．それから、お坊様たちが寝静まったころ、おばあさんとおじいさんも床に入り、おばあさんはそっと言ったんじゃ、
「おじいさん おじいさん、来迎寺の阿弥陀様もこのお坊さまと同じ笹の葉の模様が細かくついている金色の衣をまとっていたような…？」
おじいさんも小声で「そうじゃそうじゃ、わしもそう思っとったぁ？　不思議じゃのぅ？…」
「不思議じゃねぇ？…」
と、顔を見合わせて、うなずいたんだ。

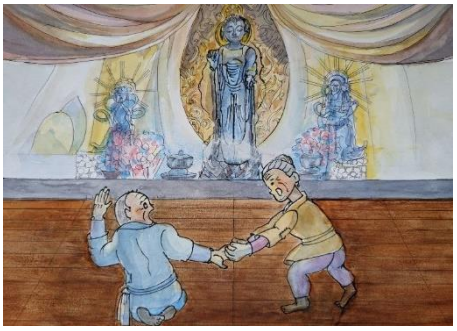
7．おばあさんは、なんとも不思議な事もあるもんじゃ、と思いながら寝ようとしたんじゃが…、どうにも気になって眠れねぇだ…。
ふと、「そうだ！」と、何を思ったか起き出してな、このお坊さまは、いつもお参りしてる来迎寺の阿弥陀様じゃぁなかんべかと、なんか確かめてみんべと思ったのじゃな？
　そんでな、お坊さまの衣を預かっていたことを思い出して、そっと、その金色の衣の内裾に「紅」を、わかんねえように付けたんじゃ。

8．翌朝、お坊さまたちは夜の明けるのを待っていたかのように目を覚まされて、おばあさんの用意したあったかい「おかゆ」を大事にいただいて、そして預けていた金色の衣を纏ったお坊さまは、「お世話になり申した」と、深々とお辞儀をされ御付きの二人のお坊様も、にこやかな顔をされながら「お世話をかけました」「お世話になりました」と、声をかけられたのじゃ。
それからトバックチに出るとな、ありがたいお経を唱え始めたんじゃぁ！　「はんにゃあ はらみたりー　南無・・・」

老夫婦は、「なんとも、ありがたいことじゃ」と、言いながらお姿が見えなくなるまで手をあわせてお見送りしたんだ。
お坊さんたちの背に、そして金色の衣に秋の朝陽がまぶしいほどにそそいで、清々しい一日の始まりだったよ。



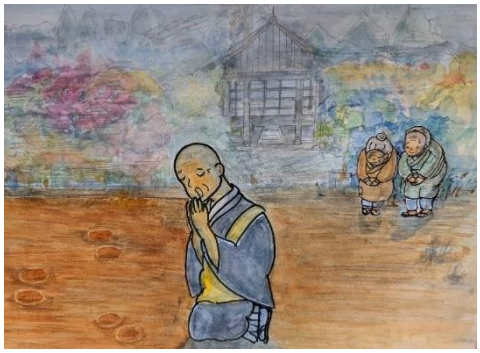
9．おばあさんは、いつになくしみじみと感じた顔で「おじいさん、よんべ話した通り、来迎寺のまことの阿弥陀様が私らの粗末な家においでになったのではあるまいか…、としか思えないんじゃー」「そんでな、どうしても確かめたくなってなぁ、お坊様の衣の裾に、ほんの少～し紅を付けてしまったんじゃよ。」と、申し訳なさそうな顔で打ち明けたんだ。
おじいさんもびっくりした顔で「そ、そうだったのか！　よ～く思い付いたもんじゃのう」「うんうん　そうかそうか」と、何度もうなずいたんだ。



10．その日の夕方、畑仕事を終えた二人は一日の無事を感謝して、いつものように来迎寺に立ち寄り、手を合わせて拝んでから、
おばあさんは、そ～っと阿弥陀様の衣の裾を覗いて見た！
「あ、あったっ～！　よんべ付けた紅が～ 紅が～」と、腰が抜ける

ほど うったまげた！
「おじいさんおじいさん、紅がちゃんとついてるよう・・・！」
「みさっしぇ！　みさっしぇ！・・・」と、慌てながら、おじいさんの手を握ったと！

ありがたいことになあ～　阿弥陀様は、二人の菩薩様といっしょに貧しくて難儀している家々の前で、しあわせを願ってお経をあげながら歩いているということじゃったんだなぁ…。
阿弥陀様たちが、夜な夜な村を行脚していることが分かったので、老夫婦はこれからどうしたもんかと思案にくれていたんじゃが、ともかく、このことを和尚さまに知らせねばと考えたんじゃ。



11. 翌日になって、畑仕事もそこそこにして和尚さまに事のいきさつを話したところ、大そう驚きなさって、
「村人のうわさはまことのことであったか！」
「これは これは、ほんとうにもったいないことじゃ！　何としてもやめてもらわねばならぬぞ！」と、言って、どうしたもんかと考えあぐねていたが…
「そうだ！足封じのおまじないをしておこうぞ！」と、お堂の前に残っていた弥陀三尊の足跡に、足封じのおまじないをすることにしたのだ。
「どうかどうか阿弥陀様、これからは くれぐれも行脚をなさりませぬように…、ずっ～と、このお堂の中にいてわしらの村をみまもってくだされ！　南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏～」と、ひざまずいて何度も何度もお経をあげたんだ。
老夫婦も、腰を折って手を合わせていたのじゃった。

12. それから後はな、和尚さまの願いが通じたのか、
この阿弥陀様たちは ふたたび行脚をすることがなくなったということじゃよ。
さらに秋も深まって来て、堀之内村の人たちは、今朝も早くから野良仕事に出かけて行って働き、夕暮れになって来迎寺の鐘の音が聞こえて来ると、お寺に向かって手を合わせ今日一日の無事を感謝するのでした。
涼しくなて来たこのごろは、
「日が短くなってきたのう」「そうじゃのう」と、あいさつを交わしながら、それぞれの家路につくのだったよ…。

おしまい